寄書

野尻湖

土屋蓼霞

六月十八日午前十時柏原停車場に下車、信濃野尻村に向ふ、十一時半頃野尻舘に着、湖水名産ハヤの醤油煮にて辨當を濟ます(一皿金六錢也)

午後一時舟を需め辨天島に行く、舟夫は小松屋とて年頃五十位の小さき人なりき。

「コノフネヤスベリガヨオゴワス」と自分の舟の速力早きを自慢しつゝ全じ姿勢にて終始怠りなく舟を辨天島へと進めぬ

島に着き二時間後の再來を約して舟夫は戻る、湖畔の柳を前景に飯綱山を遠景に急ぎ一枚スケッチす、宇賀神社に參詣す、巨樹繁茂して若草深く一種異樣の感に打たれぬ、島の東に至り鉛筆して又スケッチせぬ、寫生終りし頃舟夫來りければ又舟中の人となる、歸途たま〳〵舟を止め形拙きスケッチをなしつゝ陸に上る、湖畔にて斑尾山を寫す、夕暮野尻館に歸る、此の日の渡舟料金貳拾錢也。

野尻館の宿泊料金參拾五錢也。

『みづゑ』の曰く

大阪　富岡洗帆

僕は『みづゑ』の第二だ。僕の主人の處には僕の中間が五十程居るが、其内で僕が一番古參だ、毎月一人(?)づゝ增して行くが近頃は中々美しくなつた。全體、主人は前から畵は好だつたけれど僕を知らなかつた、そして一番初めに知られたのは僕だ。發行されて間もなく、或る中學生に買はれたが、程無く其人が中學を卒業して歸國したので、僕は中學世界や其他の雜誌と一緒に下宿屋に殘された、すると其後、今の主人が來て、宿の婆さんから僕を貰つて、大切に今迄持つて居るのみならず、それからは熱心な『みづゑ』讀者になり、今日に至つた理由だ。尤も其頃は、下宿屋の婆が、僕の表紙が硬いので、團扇の代りに「かんてき」の火を起すに使つて居たので、實に無禮な奴だつたが、流石の僕も之には閉口した、蛟龍も雲が無ければ天へ登らずで、幸ひ主人に助けられた樣なものゝ、表紙など燒け穴が明いて、其の頃の紀念になつて居るのさ……失敬

ふと浮んだ感想

長崎　TE、KA生

○七十五號で山宮君が言はれたやうに、我國の文壇の比較的進んでゐるに不拘、繪畵の後れてゐるとが甚だしい。新しい思想を抱いてる人々には大變不滿足であるらしい、けれ共是等は手近で言つて見れば春鳥會の幹部諸君及び其れと同等の人々の責であつて、我々が如何程ヤキモキしても、終に我々には手を出す權利はないのであらう、また、這麼事を言ふ權利もないのかも知れない。